

フランク王国の誕生で 成立した西欧世界



のちに世界をリードする
西欧は、フランク族が
建てた王国によって
その原形がつけられた。

西欧世界の基礎を築いた カール大帝の大王国

西ローマ帝国滅亡後、再び西欧を統一したのはフランク王国であった。

481年、メロヴィング家のカロウヴィスは、小国分立状態であったフランク族を統一してフランク王国を建設。8世紀になるとカロリング家のカール1世マルテルが、732年のトゥール＝ポワティエ間の戦い（P.57参照）でイスラーム軍を破って権威を確立し、その子ピピン3世が751年にカロリング朝を開いた。

ピピン3世の子カールは、ローマ教皇と対立していたランゴバルド王国を滅ぼしたほか北方のゲルマン人豪族を制圧した。また、イベリア半島ではイスラーム勢力と戦うなど武勇に優れ、王国の版図を拡大した。そして、800年に教皇レオ3世からローマ皇帝の帝冠を受け、カール大帝（シャルルマーニュ）として西ローマ帝国を受け継いだ。

カール大帝は、各地で教会組織を整えたほか、アルクインなどの学者を迎えて学芸を奨励し、カロリング＝ルネサンスとよばれる時代を演出した。こうして最盛期を迎えたフランク王国の下で、古代ローマ、ゲルマン、キリスト教文化の融合による西ヨーロッパ世界の基礎が形づくられたのである。

しかし、この時代の繁栄はカール大帝個人の力量によるところが大きく、その死後は王国の相続をめぐって争いが起き、ヴェルダン条約とメルセン条約によって王国は3つに分裂。その1つである東フランク王国は神聖ローマ帝国の起源になるなど、現在のドイツ、フランス、イタリアのもととなった。

フランク王国とその分割

カール大帝時代のフランク王国

西欧世界の原形をつくったとされるカール大帝時代のフランク王国は、ピレネー山脈からエルベ川にいたる広大な版図を築いた。



教皇領
ランゴバルド王国に遠征したフランク王国のピピン3世は、ラヴェンナ地方を奪いローマ教皇に献上。この「ピピンの寄進」により教皇領が成立し、19世紀のイタリア統一まで続いた。

アヴァール王国
モンゴル系とされる遊牧騎馬民族が、ドナウ川中・下流域に建設した王国。8世紀末にカール大帝の攻撃を受けて衰退した。

800年
カールの戴冠
ビザンツ（東ローマ）帝国との対立を深めていたローマ教会は、フランク王国に接近。教皇レオ3世は、ローマのサン＝ピエトロ大聖堂でローマ皇帝の帝冠をカールに授けた。

カール大帝没後のフランク王国



843年
ヴェルダン条約
カロリング家の相続問題から起きた内紛をおさめるため、フランク王国の三分割を取り決めた。

870年
メルセン条約
中フランク王国のカロリング家が断絶したため、東西両フランクが中フランクの一部を分割。